

エイズ
と
その隠喩

スーザン・ソntag

富山太佳夫訳

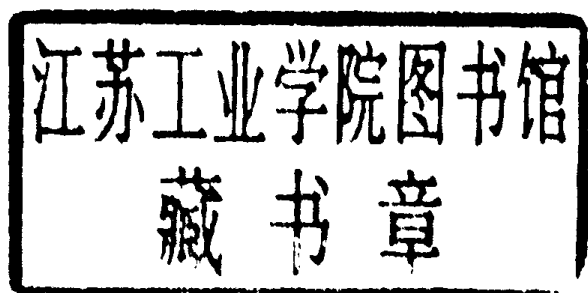
AIDS and Its
METAPHORS
Susan Sontag

みすず書房

エイズとその隠喩

スーザン・ソントグ

富山太佳夫訳



みすず書房

スーザン・ソントグ
エイズとその隠喩
富山太佳夫訳

1990年4月20日 印刷
1990年4月27日 発行

発行者 小熊勇次
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132
本文印刷所 三陽社
扉・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

© 1990 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4-622-03044-6
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

エイズとその隠喩……………3

原註……………142

訳者あとがき……………150

エイズとその隠喩

『隠喩としての病い』を読み直して、考えたこと

隠喩という言葉を使ったときに念頭にあったのは、私の知っている最も古い、最も簡潔な定義であった。つまり、アリストテレスが『詩学』のなかで述べているものである。「隠喩（メタファ）とは、他の何かに属する名前をつけることである」（一四五七b）。あるものをそれとは違う何かだ、それとは違う何かに似ていると言うのは、哲学や詩とともに古い精神の働きであり、科学的な理解も含めて、たいていの理解行為と表現の産卵場である。（そのことを確認するために、十年前に病いの隠喩批判を書いたときには、まず頭のところにいささか熱っぽい隠喩をならべて、

隱喩的思考の魅力を逆に振り払う姿勢をとってみたのである。もちろん、隱喩の力を借りずにものを考えるというのは不可能である。しかし、だからといって、避ける方がいい隱喩、しまい込む方がいい隱喩がないということではない。すべての思考は当然解釈であるにしても、ときには「反」解釈をかかげることが正しいこともあるように。

たとえば今世紀の政治生活の多くの部分にかたちを与えてきた（そして、その理解を妨げてきた）執拗な隱喩を、「右」と「左」の位置関係によって社会運動や態度を分類し、両極化させてしまう隱喩を、考えてみよう。普通その起源は、フランス革命にさいして、一七八九年の国民議会で、共和主義者と急進派が議長の左に、保守派が右に坐ったその位置関係に求められる。だが、歴史の記憶だけではこの隱喩の驚くべき生命力の説明はつかないだろう。むしろ、政治に関する言説のなかに今日までそれが残存しているのは、近代以降の世俗的な想像力にとっては、空間における肉体の位

置関係——右と左、上と下、前と後——から引き出された隠喩が社会的葛藤を説明するのに都合のいいことが実感されたからではないか。これは、社会を肉体の一種、「首（長）」の支配する統制のとれた肉体と見る伝統的ないき方に確かに新しい何かをつけ加えた隠喩的発想である。後者はプラトン、アリストテレスの頃から、政治形態を表わす隠喩の代表格であつたが、それは、抑圧を正当化するのに便利であつたからだろうか。社会を肉体にたとえるのは、社会を家族にたとえること以上に、権威主義的な秩序づけを不変、不可避のものに見せてしまう。

細胞病理学の創設者ルドルフ・フィルヒョーは、肉体について語るのに政治の隠喩を使つていて、ちょうど逆の手続きが科学的に意味のある使われ方をした数少ない例のひとつを提供してくれる。一八五〇年代の生物学の論争において、細胞こそ生命の基本単位であるとする自説を打ち出すのに有効だったのが、自由国家の隠喩だったのである。生物というのは、その構造がどんなに複雑であつても、ともかく基本的には

「多数の細胞から」できている——いわば、多数の市民からできているのであり、その体は「共和国」もしくは「まとまりのとれた共和制」である、と。フィルヒョーは科学者・修辞家のなかでも無党派としてよい人物であったが、その理由のひとつは、彼の使う隠喩の政治性のためであつたろう（十九世紀中葉の基準でゆくと、それは反權威的であつた）。いずれにしても、肉体を社会に——自由主義の社会かどうかは別にして——たとえるよりは、機械とか企業のような複雑な統合組織にたとえる方が一般的であつた時代のことである。

ギリシャにおいて西洋医学がその端緒についた頃には、肉体の統一を表わす重要な隠喩は芸術から借りてこられた。それから数世紀後になると、ルクレチウスがそうした隠喩のひとつである「調和」を選び出して、それでは肉体が本質的な器官とそうでない器官からできているという事実を、また肉体の物質性つまり死をきちんと論じられはしないと一蹴した。ルクレチウスがこの音楽に由来する隠喩を切り捨てた箇所を

引いてみよう——私の知るかぎりでは、病氣と健康を隠喩でとらえようとする発想への批判としては最初のものである。

心すべきは、すべての器官が

等しく重要ではないこと、また健康は

同じくすべてによるのでなく、いくつかの——

風の種子とか、あつい生命力とか——

ものの力でわれらは生きていること。それがなくなれば

命は死にゆく器官を去る。精神と

魂は本来ひとの部分だから

音楽家はいや高きヘリコンよりもたらされた

言葉を手元にとどめるがいい、

「調和」を手元にとどめるがいい——それともそれを

ほかで見つけて、おのれの術のかかわらぬ

何かに適用してしまったのか——

その正体が何であれ、それは音楽家に帰すべきもの。

（『事物の本性について』Ⅲ、一二四—三五行）

このように一般性の強いレベルで肉体をめぐる隠喩思考の歴史を考えるとすれば、他の芸術やテクノロジー、とくに建築に由来する多くのイメージも含まれることになるだろう。なかには、肉体を神殿と見る聖パウロの訓話的、詩的発想のように、説明をこぼむ隠喩もある。逆に、肉体工場説（健康の旗のもとに肉体はうまく作動するというイメージ）、肉体砦説（崩壊が強く出る肉体のイメージ）のように、かなりの科学的な波及性をもつものもある。

この砦のイメージは近代科学のずっと前からあるもので、病気を死、人間の弱さ、傷つきやすさの隠喩とする見方とひとつになっている。ジョン・ダンは、みずからの死を覚悟したときに書き綴った、病気に寄せる散文のアリア群『死の迫れる時の祈り』（二六二七年）のなかで、病気を侵入してくる敵と、肉体に砦を包囲する敵とみなしている。

我らは健康を熟視し、飲食、空気、運動を熟慮し、その健康という建物を作る石の一々を刻み、かつ磨く。健康とはたゆまざる長き仕事によるものである。だが一瞬にして大砲がすべてを砕き、崩し、破壊する。注意していたにもかかわらずくい止められなかった、監視にもかかわらず探知できなかった、病いが……

部位によつては、ほかよりも脆いところもある。ダンによれば、「一瞬にして地雷の

ごとく心臓を吹きとばす」、「自然に背いた」あるいは「謀叛性の」熱病の包囲であっても、脳や肝臓なら耐えられる。ダンのイメージでは、病氣は侵入者なのだ。近代の医学思想は、おおまかな軍事的隠喩が特定化しだしたときに始まる、と言ってもいいだろうが、それはようやく、フィルヒョーの細胞病理学に代表される新しい研究法が導入され、病氣はそれとわかる特定の目に見える（顕微鏡の助けを借りれば）生物によってひき起こされるのだという正確な理解が生まれるようになったときのことである。ほんとうの意味で医学が力を発揮し始め、軍事的隠喩が新たな信憑性と正確さをもつに到るのは、病氣が侵入者とされることがなくなり、微生物が病氣を起こすとされるようになったときであった。そのとき以来、医学にかかわりのある場の記述というと、その到るところに軍事的隠喩がますます浸透するようになった。今では病氣はエイリアンの生物の侵入で、肉体の方は、免疫学的な「防衛機構」を動かすといった軍事行動で対抗すると言われる。たいていの化学療法の言葉では、医学も「攻撃す

る」。

公衆衛生教育の分野ではまだおおまかな隠喩が残っていて、たえず病気が社会を侵略するという言葉がされ、病気による死亡率を低下させる努力が戦い、闘争、戦争と呼ばれる。今世紀の初めにはこの軍事的隠喩が、第一次大戦中は反梅毒キャンペーンにおいて、戦後は反結核キャンペーンにおいて、とくに目についた。一九二〇年代のイタリアで繰広げられた反結核キャンペーンの一例に、「ハエとの戦争」というポスターがある。ハエの運ぶ病気の恐ろしさを描いたものだ。そこではハエが、罪なき人々の上に死の爆弾を投下する敵機として描かれている。その敵機に「細菌」とか、「結核菌」とか、あるいはあつさり「病気」と書かれている。そして先頭を行くハエに、客としてなのか、パイロットとしてなのか、フードつきの黒いマントを着た骸骨がまたがっている。「この武器で、結核、征服」という別のポスターでは、結核と闘う手段をひとつずつ銘にした剣で、死が壁ぎわに追いつめられている姿が描かれている。

る。一本の剣には「清潔」と書かれている。別のには「日光」と。あとは「空気」、「休息」、「食事」、「衛生」。(言うまでもなく、これらの武器は効果がなかった。結核を征服した、いや、治療したのは抗生物質であるが、それが発見されるのはほぼ二十年後の一九四〇年代のことである)。

かつては病氣に闘いを挑んだのは医者であったが、今では社会全体である。要するに、戦争というものが集団のイデオロギー的動員のための機会になってくると、「敵」の打倒を目標としてかかげる改善キャンペーン全部に使える隠喩として、戦争という概念が有効になってくるのである。過去には貧困に対する闘いがあったが、それが今では「ドラッグに対する闘い」とか、特定の病氣(たとえば癌)に対する闘いにさま変わりしている。資本主義の社会では、つまり、倫理原則に訴えかける幅をますますせばめ、そうした訴えかけを眉唾ものにし、自分の行動を自己利益と利潤能力のはかりに合わせないのは愚かなことだとしか考えない社会では、軍事的隠喩の濫用は避けが